



# 第一〇〇巻を迎えるにあたって

田代 和美

二十一世紀の幕開けと同時に、本誌が一〇〇巻を迎えた。一月号始まりということ自体が、現代の雑誌としては稀であり、一〇〇年の歴史を物語ってもある。戦時下での休刊を除いて、一〇〇年間に亘って毎月毎月発行されてきた訳であるから、その長さともまたその重さに圧倒される。

雑誌を作る側としては、九十八巻あたりから、もうすぐ一〇〇巻を迎えることが気に懸かり始め、一〇〇巻になったら、何か一〇〇巻記念の企画を立てる必要があるの



だろうと思ってきた。ハレの日の気分で打ち上げ花火を上げるのだろうと漠然とそう思ってきた。しかしいざ実際に一〇〇巻を迎えてみると、これという特別なことができるわけでもなく、それまでと同じように毎月毎月の編集に追われている自分がいる。実際に迎えてみれば、この一〇〇巻は到達点ではなく、通過点にすぎないことを実感している所である。地道に地道に毎月作りあげていく。その結果として一〇〇巻に至った。それがこの雑誌なのだろう。派手さもなく、時代の流れを感じながらもそれに乗ってしまうこともなく、子どもの育ちを支える大人でありつづけることを願いながら、変わっていくものと共に変わらないものを見つめ続けてきたのである。

私は、たまたまこの一〇〇巻を迎えた時期に編集に携わっているという立場であり、しかも携わったのはこの五年間だけなので、一〇〇巻を迎えるにあたって何かを書くということに躊躇を覚えている。しかも倉橋主幹のように、一冊の雑誌をほとんど全部自分で書くことも一度ならずあった方と違い、たまに埋め草に雑文を書くくらいで、ひたすら皆様に原稿を依頼をしている立場である。そんな立場なので、一〇〇巻を迎えたことについても、ただただ、これまで本誌を作り続けてきた方々、そして読んでくださった方々への感謝の気持ちがあるのみである。

一〇〇年前というと、私の祖父母すら生まていなかった時代である。この間の年月を考えると、人間を取り巻く環境は大きく変わった。この数年をみてもあまりに激し



く私達の生活環境は変化している。今、巷ではIT革命なる言葉が大手を振って歩いている。子どもを取り巻く環境は、これまでも大人の生活環境の変化に伴って当然変化を遂げてきた。しかし大人と子どものボーダレス状態が進行しつつある現代では、大人の世界的変化の影響は、この先、予想以上に速いスピードで子どもの世界に及んでいくだろう。情報技術の進歩は、人の生活を便利にするだろうが、便利さの裏側で失われていくものやマイナスの影響に敏感でありたいと思う。情報にふれるという事だけをとっても、様々な実体験を積んだ上で情報に触れるのと、実体験のない子どもが情報にさらされるのでは、影響の大きさはかなり異なるだろう。現に大人の世界でも、例えば現代の子育ての難しさの要因には、必ずといってよいほど情報量の多さが挙げられる。これは実体験のない者が、情報にさらされることのマイナスの影響を端的に示している。子ども達を取り巻く環境の変化は、その影響を考慮したり、検討する間もなく、実態先行で進んでしまっている。しかし環境面で大人と子どものボーダレス化が進んでいるにしても、子どもは一足飛びに大人になるわけではない。二十一世紀の子ども達が人間としての基本的な部分を形成する幼児期をどのように過ごせるのかは、子どもの傍らにいる大人の大きな課題であるだろう。

情報が網の目のように張り巡らされ、瞬時のスピードで飛び交う時代の中で、この小さな雑誌にできることは、今述べた、この幼児期という時代が、人間としての基本



的な部分を形成する時代であるという、変わらないものをじっと見つめ続けていくことに他ならないであろう。刻々と変わりゆくものとの接点を考慮しながらも、変わらないものを見つめていく。それが、おそらくは、この小さな雑誌にできることであり、結局は、今まで本誌が貫いてきた方針と何ら変わりはない。

現在、少年を始めとする子ども達による犯罪や問題がクローズアップされ、少年法や教育基本法が改正されようとしている。しかし少年は一足飛びに少年になるわけではない。今は、大きな声で叫ばれてはいないもの、おそらくいずれこの先、年齢が降りてきて、乳幼児期の育ちに焦点が当たるといえる時代がやってくるだろう。そんな時に、子どもの傍らにいる人々が、近視眼的な時代のムードに流されることなく、人間としての基本的な部分を形成するという、幼児期ならではの幼児の当たり前前の生活を守っていく大人でありつづけられるように、少しでもそれを支えられる本誌でありたいと願う。

最後に、この場をお借りして、長期間、本誌を採算を度外視して出版し続けてくださったってきたフレールベル館に、心より感謝の念を捧げたい。

(お茶の水女子大学)